

XI 日本についての印象

- 滞在中一番困った事はなにか
- 来日前と来日後の日本の印象について
教育水準が極めて高い。

XII 総合評価

- このコースを発展させるための研修員の提言
研修内容が多岐にわたっているため研修期間は50～60日位が適当と考えられる。
- このコースに対する研修員の総合的な意見

XIII ファイナルレポート

- ファイナルレポートの中で特に注目しておく点

XIV 評価会

- 評価会に参加しての担当のコメント

XV その他

- このコースについてその他コメントしておく点
農協関係といっても種々の分野から研修員が参加しているため一般的な知識を一通り吸収する農協一般コースであるが、今後特定の専門分野（販売・購買、信用事業、指導、教育、経営管理、監査）に重点を置いてコース設定することも検討すべきである。

〔ファイナル・レポート要約〕

<研修全般>

- ① 日本の農協の現状・実務を詳しく知るために、研修期間をもっと長くしてほしい。
Mahfuzar (バングラデシュ), Nagasava (ブラジル)
Leila (ブラジル) Mya (ビルマ), Singh (フィジー)
Bapuji (インド), Acharya (ネパール), Soto (ペルー), Shah (タンザニア)
- ② TICでのオリエンテーションの期間を減らして、その分本研修にまわしてほしい。
Machuca (ブラジル), Nagasava (ブラジル)
- ③ Allowanceをもう少しふやしてほしい。
Mya (ビルマ), Singh (フィジー), Bapuji (インド)
- ④ 講義開始時刻を早めて、午後の自由時間をふやしてほしい。
Machuca (ブラジル)

- ⑤ スポーツ施設がほしい。
Machuca (ブラジル)
- ⑥ 通訳のできるコンピュータを発明するよう科学者に申し入れては？もし可能なら手紙で知らせてほしい。
Mahfuzar (バングラデシュ)
- ⑦ 宿泊施設 (IDACA) に、研修員用のバスを一台用意しておいてほしい。
Mahfuzar (バングラデシュ)
- ⑧ 来日前に、日本に関するある程度のインフォメーションを得ておきたい。
Soto (ペルー) (東京の交通機関・日本人の習慣)

<講義・見学等研修内容>

- ① 国情も異なり、職種・立場も様々な各研修員に日本の農協を理解しやすくするために、政府援助に関する講義をしてほしい。
Adinata (インドネシア)
- ② 農協訪問の機会をもっと多くしてほしい。
Leila (ブラジル)
- ③ もっと専門分野にまで及ぶ研修をしてほしい。
Soto (ペルー)
- ④ 黒板に字を書いている時間を節約するために、教室内に映写機・図表など、資料を即提供できる材料を用意しておいては？黒板にものを書いている時間が長くてもったいない。
Burapa (タイ)
- ⑤ 農協の事だけでなく、日本の社会生活や経済面の事も学びたかった。
Roonphai (タイ)

<研修旅行>

- ① 色々な施設をゆっくり見るため、期間をもっと長くしてほしい。
Adinata (インドネシア), Lantican (フィリピン), Shah (タンザニア)
- ② 島根県だけでなく、もっと多くの県を訪ねたい。
Mahfuzar (バングラデシュ)
- ③ 農家訪問の時間をもっと長くにとってほしい。
Machuca (ブラジル)
- ④ 農家訪問は2軒だけでは少ない。もっと多くの農家を訪問したい。
Machuca (ブラジル)
- ⑤ 農家訪問はもっと少人数で行なってほしい。人数が多過ぎると詳しくきけない。
Taleb (バングラデシュ)
- ⑥ 旅行中の allowance
Acharya (ネパール)

<今後、JICAに望む協力>

- ① 日本から専門家を派遣してほしい。
 - Mahuzar (バングラデシュ)……組合の業務に携わっている人
 - Weerawardana (スリランカ)……技術指導
 - Burapa (タイ)……婦人部活動 1年間位。
 - Roonphai (タイ)
 - Pornthip (タイ) } ……教育・訓練分野
- ② 一段階進んだ、専門分野ごとの再研修を実施してほしい。
 - Singh (フィジー), Bapuji (インド), Adinata (インドネシア)
 - Shah (タンザニア)
- ③ 活動推進のために助成金を出してほしい。
 - Burapa (タイ)
- ④ 自国(バングラデシュ)で手に入らない小型の農業用機械を送ってほしい。
 - Taleb (バングラデシュ)
- ⑤ 資料を郵送してほしい。
 - Mya (ビルマ)……Coop Movementに関する最新情報
 - Bapuji (インド)…… ”
 - Singh (フィジー)……教育・信用事業関係
 - Adinata (インドネシア)……農協経営, プロジェクト評価, 組織計画, 業務活動案内(指導)
 - Acharya (ネパール)……Coop Movement関係
 - Soto (ペルー)……農協に関する一般情報
- ⑥ 新しい活動を取り入れるために、自分の所属している組織から一人でも多くの人が、コロポプラン研修に参加する機会を持てるようにしてほしい。
- ⑦ 自分の所の組合員との情報交換を保ってほしい。
- ⑧ フィジーの研修員受入れ枠を拡大してほしい。
- ⑨ グループ研修(信用事業と消費者)を実施してほしい。
- ⑩ 1~2年後に復習の意味で、補習研修の実施を考えてほしい。
 - Bapuji (インド)
- ⑪ 今までにも農業分野で数々の技術援助をしてもらってきたが、インドネシアの農民の生活向上のため今後も一層の援助をよろしく。
 - Suranto (インドネシア)
- ⑫ 別添の資料(ポルトガル語)を参考の上、今後共色々な指導をしてほしい。全農、特に卸売市場で働く人との接触を保ってゆきたいし、できれば全農から現地に人を派遣してもらえるよう、働きかけてほしい。
 - Machuca (ブラジル)

JICAへの要望

全体としては、爽り多い素晴らしい研修で、不平・不満は殆んど無いという事であった。しかし、幾つか今後の為に考慮してみて欲しいという点が指摘された。

○自分の国から持ち出せる金額が非常に制限されているので、もう少し allowance をふやしてもらえると助かる。しかしこの点については「充分」という意見もかなりあり、2つに分かれている。

○これだけ盛り沢山の内容をこなす為には、もう少し期間が欲しい。

(50~60日位の日程にして欲しい。)

○宿舎と講義の場所が同一の場合は、もう少し早く朝の講義を始めて、昼休みを長くするか、夕方の終了時刻を早めて欲しい。

(8:00か8:30頃から始めてはどうか?) → IDACA

○旅行以外にも、実際に現場を見学する機会がもっとあった方が良い。

講義と見学が半分ずつ位の割合だと理想的。

○交通の便が余り良くないので、余暇に汗を流せるスポーツ施設などを考慮してもらえると有難い。(講義終了後、散歩と卓球位しかできなかった) → IDACA

○農協関係といっても、種々の分野から研修員が集まっている為、一般的な知識を一通り吸収するといった感じのコースだったので、次回に是非もう少し特定の分野を深く追及するコースを設けて欲しい。

(accountingについて、とか managementについて……ナド)

研修旅行の感想

6/22(月) 181

< Bangladesh >

○機械化が驚くほど進んでいた。

○農作業において、男女が平等な役割を果たしていると思われた。

(Bangladesh では、男女の作業が区別されている)

< Brazil >

○最高の場所に泊まって、色々な人に会えて満足。ただし時間が限られていて、ゆっくり見学できなかったのが残念。

○京都の街がとても印象的だった。

○各農協の人達がとても温かく迎えてくれて感激した。

○農家の人達が実際に働いている所を見学できず残念。

< Burma >

○日本の農協は組織がしっかりしていて相互の結び付きが強いということを肌で感じた。

< Fiji >

○単協から全国レベルまで一貫した活動が行なわれており、日本の農協には「UNITY」というものが存在している。

○農協と民間企業との間に、仕入れ・販売その他色々な分野での競争があるということがわかった。

< India >

○県・市・町の農協の実務を知る機会としては短すぎた。

- 日本の教育や伝統そのものが、農協の発展を支えてきたと思った。
- 政府が農業を支えているといった印象を受けた。
- 旅行中の allowance をもう少しふやしてほしい。

<インドネシア>

- 日本の農協は、長い歴史と経験を持っているということを感じた。
- 組合員に対して農協はかなりゆきとどいた指導をしている。
- 総合農協がとても発達している。
- 政府の資金援助が組合員教育等に役立てられている。
- すぐれた人材に恵まれている。

<ネパール>

- 日本の農協は組織が実にしっかりしている。
- 教育・訓練がゆきとどいているので、新しいものの導入もうまく行っている。
- 単協レベルから運動が起こると、上のレベルでの受入れがスムーズに行なわれるしくみになっていると感じた。

<ペルー>

- 教育程度が高く、豊かな国のしっかりとした農協という印象を受けた。

<フィリピン>

- 生活面にまで及ぶ、農協活動の活発さに驚いた。
- 農家を訪問してみて、自国の農家と余りに生活レベルの差があることを認識した。

<スリランカ>

- 東京と全く異なる農村地帯の生活をのぞくことができ良かった。
- 日本では都会も農村も一様に、ある程度の生活レベルを維持していることを知り驚いた。生産価格が押えられて仲買人ばかりが利益を得るなどという現象はみられないようだ。
- コンピューター化が進み、交通網も整備されているため、輸送が合理的。
(スリランカでは輸送だけに3~4日費してしまう)
- 国民の教育が末端までゆきとどいている。
- 組合員に強い集団意識が感じられた。
- 農協の指導体制がしっかりしている。
- GNPの3~4%しか占めていないにもかかわらず、産業の中で農業の占める位置が高い。(新聞・テレビ等で農業のことがよく報道される。政府の資金援助がある……etc)
- 農家が農地の真中に位置し、田畑は必ず道路の脇にあり、作業面で合理的。(スリランカでは田畑が不便な所にあることが多い。)

<タンザニア>

- 旅行の期間をもう少し長くして、見学・実習の機会を多く持ちたかった。
- 機械化が非常に進んでいる。(西アフリカでは、まだまだ自然に育つものを主としているケースが多い。)
- 経済発展のために現在の日本に生じている数々の問題が、将来自国が日本の様に発展した際には参考にできると思う。

<タ イ>

- 高い教育程度，農道の驚くほどの整備が最も印象的だった。
- 生活水準も高く，農協の種々の活動が活発。

農-5	コース名： 家畜衛生研究	定員 10名
-----	--------------	-----------

受入期間： 56.5.21~56.11.20

関係省庁： 農林水産省

受入機関： 家畜衛生試験場

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
ビルマ	3	2			
インドネシア	2	1			
マレーシア	1	1			
パキスタン	2	0			
フィリピン	2	2			
スリランカ	1	1			
タイ	3	1			
アルゼンティン	2	0			
ブラジル	5	2			
メキシコ	2	1			
パラグアイ	1	1			
ペルー	1	0			

受入担当： 岩崎 薫

コーディネーター： 加藤 倫子

昭和56年度家畜衛生研究コース

1. コースの沿革

本コースは昭和37年度から始まり本年で19回目を終了、合計184名(東南アジア134名72%, 中南米39名22%, 中近東11名6%)を受け入れた。(昭和54年度は研修先である家畜衛生試験場が小平市から筑波学園都市に移転したため休止した。)

獣医師を含む家畜衛生技術者あるいは畜産技術者の絶対数が少ない開発途上国に於て帰国研修員は、それぞれの国の畜産、獣医関係分野の指導的地位を得て活躍している。

本来、集団コースではあるが本コースの長年の運営経験から、また関係者の協力により、個別実習の機会をできる限り与え、その期間を年毎に延長してきたことは見逃すことができない。当初数回は6カ月のほぼ全研修期間を通じて集団による講義が行われていたが現在縮小されている。これは研修員からも高く評価され、研修員も帰国後、できる限り直接役立つテーマを選んで個別実習をすることから、本コースの評価を高めてきているようである。

国によって風俗、習慣、食生活、宗教生活などに違いがあるのは当然で、元来畜産業の形態は国によって大きく異なっている。すなわち飼育されている家畜の種類が国によって異なっている。従って集団コースのカリキュラム編成に当っては、獣医学術を中心に最大公約数的な内容になり、研究員にとってはその受けとり方に種々の違いが出てくることはやむを得ない。従って割当国を強いて限定する必要はないが考慮する必要はある。

2. 本年度コースの運営方針

昭和56年5月21日から11月20日までの6カ月間12名を受入れた。

本年度は昨年度の反省を踏まえ従来実施してきた日本語集中講義は研修に直接関係ないため取り止め、一方その分、研修員から好評の個別研修期間を延長することとした。

研修内容は前回と変わりなく集団研修と個別実習・実験がほぼ半々の割合であり、前半で一般的、基礎的科目に重点をおき、後半で個々の研修テーマに沿って研修出来るように組まれている。

3. 研修業務の経過と内容

(1) 受入れ決定の経緯

定員10名、ビルマ等12カ国に割当たのに対し23名の応募があり、そのうち12名を受入れた。応募状況は別表の通りである。

(2) 講 義

プログラム全体に占める講義の割合は約25%、又受入れ先講師と外部講師との割合は受入れ先が約63%、外部講師の依頼先は支場、大学、研究所等であった。

(3) 個別研修

プログラム全体における個別実習の割合はおよそ40%であった。個別テーマの決定方法については、開始3週間位前に個々に希望テーマにつきヒアリングをし、助言を与えながらテーマを決定する。今回は約3カ月間の中に個々に3~5カ所、例えば家畜衛生試験場の各研究室及び支場、動物検疫所、畜産試験場等において研修を受けた。日程表については別表を参照されたい。

(4) 研修旅行

今年度は小旅行を2回増やし、計4回実施した。見学先は下記の通りである。

- ① 6月16日~19日 東京都家畜保健衛生所、麻布大学獣医学部、
日本生物科学研究所等
- ② 9月7日~14日 北海道庁畜産課、雪印乳業、北海道支場、家畜改良事業団、
八戸家畜衛生保健所、北里大学獣医畜産学部等
- ③ 10月13日~15日 日本中央競馬会総合研究所栃木支所、
栃木県家畜衛生研究所、大笹牧場等
- ④ 11月2日~7日 広島県畜産課、県畜産試験場、
日本中央競馬会栗東トレーニングセンター等

(5) 教材

特に定まったテキストはなく必要に応じ、そのつど講師が資料等を用意した。

(6) その他

研修期間中にたまたま日本獣医学会、有毒微生物国際シンポジウム、マイコプラズマ病日米合同部会などの会議が開催されたため、専門分野に関係ある研修員がそれぞれ参加し、新しい知識を修得し、意見の交換等を図り、非常に有意義だったようである。

4. 研修終了時の所見

前年度の研修員と比較すると皆真面目で熱心に研修を受けてはいたが、ただ積極的な面にかける所があり、もっと各研究室を訪ね、知識の吸収を図って欲しかった。一部の研修員からの要望として、GIに個別研修としてSpecialized Fieldとせず実際どういう分野のものを選択出来るのか予め明示して欲しいとか、又ほぼ全員から集団講義は3週間位にして後は個別研修にして欲しいという意見が出たが、本コースはあくまでも集団研修であるので、受入先の各研究室、関係機関の業務上の問題もあり、これ以上個別研修の枠を拡げるのは困難と思われる。

コース担当部局： 農林水産省家畜衛生試験場

企画連絡室

筑波インターナショナルセンター担当者

研修課 新垣和成

研修監理員 加藤倫子

昭和56年度海外研修家畜衛生研究コース

月 日	曜	題 目 (午前 9:00-12:00 午後 13:00-16:00)	担 当 者
6月 1日	月	研修についてのオリエンテーション } (開講式) 日本のお畜産と家畜衛生事情 放牧牛の疾病対策 栄養と代謝障害 コクシジウム症	芦 田
2日	火		場 長ほか
3日	水		照 井
4日	木		伊 出
5日	金		角 田
6日	土		
7日	㊦	トキソプラズマ病・鶏のロイコチトゾーン病 鶏の細菌性疾病 鶏のウイルス性疾病 鶏の飼育環境と消毒法 家畜疾病の臨床生化学的診断法	伊藤(進)・藤崎
8日	月		伊藤(静)
9日	火		野 村
10日	水		古 田
11日	木		田中(享)
12日	金		
13日	土		
14日	㊦	牛乳房炎の診断と治療法 関東近県畜産施設見学	久 米
15日	月		
16日	火		
17日	水		
18日	木		
19日	金		
20日	土		
21日	㊦	細菌性膿瘍・ヨーネ病 牛の出血性敗血症 炭疽・豚丹毒 牛の細菌性呼吸器病 ブルセラ病・馬子宮炎	湊・横溝
22日	月		平 棟
23日	火		安 藤
24日	水		橋 本
25日	木		伊佐山
26日	金		
27日	土		
28日	㊦	細菌の薬剤耐性 豚萎縮性鼻炎・緑膿菌感染症	寺 門
29日	月		清水(健)
30日	火		

月 日	曜	題 目 (午前 9:00-12:00 午後 13:00-1600)	担 当 者
7月 1日	水	豚インフルエンザ・豚ウイルス性疾病 牛のウイルス性疾病・牛白血病 馬伝染性貧血診断法	杉村・清水(悠) 稲葉・甲野 中 島
2日	木		
3日	金		
4日	土		
5日	Ⓟ	実験動物の繁殖・育種 牛の繁殖障害の診断と治療法 個別実習課目の選定ヒアリング 個別実習についてのオリエンテーション 個別実習開始	後 藤 山 内 芦 田 芦 田 各研究室
6日	月		
7日	火		
8日	水		
9日	木		
10日	金		
11日	土		
12日	Ⓟ	研修旅行オリエンテーション	
13日	月		
14日	火		
9月 1日	火		
2日	水		
3日	木		
4日	金	東北・北海道研修旅行 (支場・家畜保健衛生所・牧場・人工授精 センターなど) 第92回日本獣医学会(北里大学)	
5日	土		
6日	Ⓟ		
7日	月		
8日	火		
9日	水		
10日	木	個別実習再開	
11日	金		
12日	土		
13日	Ⓟ		
14日	月		
15日	ⓧ		
16日	水		
17日	木		
18日	金		
19日	土		

月 日	曜	題 目 (午前 9:00-12:00 午後 13:00-16:00)	担 当 者
9月20日 21日 22日 23日 24日 25日 26日	㊸ 月 火 水 木 金 土		
27日 28日 29日 30日 10月 1日 2日 3日	㊸ 月 火 水 木 金 土		
4日 5日 6日 7日 8日 9日 10日	㊸ 月 火 水 木 金 土	有毒微生物に関する日米シンポジウム傍聴予定	
11日 12日 13日 14日 15日 16日 17日	㊸ 月 火 水 木 金 土	個別実習再開	
18日 19日 20日 21日 22日	㊸ 月 火 水 木		

月 日	曜	題 目 (午前 9:00-12:00 午後 13:00-16:00)	担 当 者
10月 23日 24日	金 土		
25日 26日 27日 28日 29日 30日 31日	① 月 火 水 木 金 土	} マイコプラズマ病日米合同部会傍聴予定 個別実習終了 研修旅行オリエンテーション	
11月 1日 2日 3日 4日 5日 6日 7日	① 月 ② 水 木 金 土		
8日 9日 10日 11日 12日 13日 14日	① 月 火 水 木 金 土	} 関西・中国地方研修旅行 (養鶏・養豚・肉牛飼育など)	
15日 16日 17日 18日 19日 20日	① 月 火 水 木 金	研修成果の最終評価会 閉講式と送別パーティ } 研修員帰国	芦 田 場 長ほか

DAILY PROGRAM FOR INDIVIDUAL STUDY IN 1981

Name & Country of the Participant	Subjects of the Study	Duration	Laboratory
Mr. Myint (Burma)	1. Basic Technique of Diagnosis of Bovine & Swine Reproductive Disorders	7/ 9 (Thu) - 7/31 (Fri)	Physiopathology Lab., NIAH
	2. Clinical Examinations of Bovine Reproductive Diseases & Common Diseases	8/ 4 (Tue) - 8/31 (Mon)	Hokuriku Branch Lab., NIAH
	3. Techniques for Bovine & Swine Artificial Insemination	(Undecided)	
Mr. Aye Cho (Burma)	1. Basic Techniques for Histopathological Examination	7/ 9 (Thu) - 10/30 (Fri)	1st Pathology Lab., NIAH
Mr. Luiz Carlos Souza (Brazil)	1. Bovine Brucellosis	7/ 9 (Thu) - 8/31 (Mon)	1st Bacteriology Lab., NIAH
	2. Salmonellosis	9/16 (Wed) - 10/30 (Fri)	Feed Microbiology Lab., NIAH
Mr. Geraldo Bach (Brazil)	1. Laboratory Diagnosis of Rinder-pest (Looking for Literature)	7/ 9 (Thu) - 7/31 (Fri)	2nd Virology Lab., NIAH
	2. Influenza	8/ 3 (Mon) - 8/31 (Mon)	1st Virology Lab., NIAH
	3. Transmissible Gastroenteritis & Pseudorabies	9/16 (Wed) - 10/ 2 (Fri)	Hog Cholera Lab., NIAH
	4. Sanitary Defense Program	(Undecided)	
	5. Avian Diseases		
Mr. Darmono (Indonesia)	1. Basic Techniques for Protozoology & Helminthology	7/ 9 (Thu) - 10/30 (Fri)	1st & 2nd Parasitology Lab., NIAH

Name & Country of the Participant	Subjects of the Study	Duration	Laboratory
Miss Vasandra Devi (Malaysia)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Basic Techniques for Virological Examination 2. Laboratory Diagnosis of Avian Viral Diseases 	<p>7/ 9 (Thu) – 9/ 3 (Thu)</p> <p>9/16 (Wed) – 10/24 (Sat)</p>	<p>Viral Products Lab., NIAH</p> <p>Poultry Disease Lab., Branch of NIAH</p>
Mr. Jaime Arias Ibarondo (Mexico)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Diagnosis and Vaccine Production of Hog Cholera 	<p>7/ 9 (Thu) – 10/30 (Fri)</p>	<p>Hog Cholera Lab., NIAH</p>
Mrs. Emilie Navarro Valera (Philippine)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Bacteriological Examinations for Infectious Diseases 2. Examination of Anaerobia 3. Technique of Fluorescent Antibody Test 	<p>7/ 9 (Thu) – 9/18 (Fri)</p> <p>9/21 (Mon) – 10/30 (Fri)</p>	<p>1st Bacteriology Lab., NIAH</p> <p>2nd Bacteriology Lab., NIAH</p>
Miss Yolanda Ocampo Dinozo (Philippine)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Swine Reproductive Diseases 2. Serological Diagnosis of Swine Infectious Diseases 3. Animal Quarantine (Administrative Guidelines on Disease Prevention) 4. System of Diseases Monitoring Surveillance 5. Vaccination Program and Control Measures of Infectious Diseases 	<p>7/ 9 (Thu) – 7/31 (Mon)</p> <p>8/ 3 (Mon) – 8/31 (Mon)</p> <p>9/ 1 (Tue) – 9/19 (Sat)</p> <p>9/21 (Mon) – 10/ 3 (Sat)</p> <p>10/ 5 (Mon) – 10/30 (Fri)</p>	<p>Physiopathology Lab., NIAH</p> <p>Hog Cholera Lab., NIAH</p> <p>Animal Quarantine Office, YOKOHAMA, NIAH</p> <p>"</p> <p>"</p>
Mr. Augusto Gavilan (Paraguay)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Diagnostic Antigen Preparation of Equine Infectious Anemia 	<p>7/ 9 (Thu) – 10/30 (Fri)</p>	<p>Physicochemistry Lab., NIAH</p>

Name & Country of the Participant	Subjects of the Study	Duration	Laboratory
Mr. A.P. Sriharan (Sri-Lanka)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Basic Technique of Diagnosis of Bovine & Swine Reproductive Disorders 2. Clinical Examinations of Bovine Reproductive & Common Diseases 3. Techniques for Bovine & Swine Artificial Insemination 	<p>7/ 9 (Thu) - 7/31 (Fri)</p> <p>8/ 4 (Tue) - 8/31 (Mon)</p> <p>(Undecided)</p>	<p>Physiopathology Lab., NIAH</p> <p>Hokuriku Branch Lab., NIAH</p>
Mrs. Nitaya Dilockiat (Thailand)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Basic Techniques for Bacterial Diagnosis of Avian Diseases 	<p>7/ 9 (Thu) - 10/30 (Fri)</p>	<p>Feed Microbiology Lab., NIAH</p>
Mr. Tijan Wariyay (Liberia)	<ol style="list-style-type: none"> 1. Basic Techniques for Diagnosis of Domestic Animal Diseases 	<p>9/ 9 (Thu) - 10/30 (Fri)</p>	<p>1st Bacteriology Lab., and Others, NIAH</p>

講 師 リ ス ト

氏 名	所 属
清水 武彦	家畜衛生試験場長
芦田 浄美	〃 企画連絡室普及科長
伊藤 進午	〃 寄生虫第二研究室長
藤崎 優次郎	〃 〃 研究第二部長
佐藤 静夫	〃 飼料汚染微生物研究室長
湊 一	〃 細菌第二研究室長
横溝 祐一	〃 ツベルクリン研究室主任研究官
橋本 和典	〃 細菌製剤研究室長
伊佐山 康郎	〃 細菌第一研究室長
寺門 誠致	〃 細菌製剤研究室主任研究官
杉村 崇明	〃 ウイルス第一研究室主任研究官
清水 悠紀臣	〃 豚コレラ研究室長
稲葉 右二	〃 ウイルス製剤研究室長
甲野 雄次	〃 応用研究室長
中島 英男	〃 理化学研究室長
後藤 信男	〃 実験動物研究室長
角田 清	〃 研究第一部長
伊出 優	麻布大学獣医学部教授
野村 吉利	日本生物科学研究所理事
田中 享一	麻布大学獣医学部教授
久米 常夫	北里大学獣医学研究所助教授
安藤 敬太郎	北里大学獣医学研究所教授
山内 亮	日本獣医畜産大学教授
照井 信一	家畜衛生試験場東北支場主任研究官
古田 賢治	〃 鶏病支場第一研究室長
平棟 孝忠	〃 北陸支場第三研究室長
清水 健	〃 北海道支場第三研究室長

「家畜衛生研究」集団研修コース参加人員

年 昭和 国別	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	55	56	計
ビ ル マ	1										1	1		2	1	1	1	1	2	11
イ ン ド	1	2							2	1	1				1					8
イ ラ ン	1		1	1	1															4
フ ィ リ ピ ン	2	1		1	1	1		1		1	2	3	2			2	2	1	2	22
タ イ	1	1	2	1	1	1	1	1		2	2		1	1		2	1	1	1	20
ス リ ラ ン カ		1					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	13
イ ン ド ネ シ ア		1	1				1	1	1	1	1	2	1		1	2	1		1	15
パ キ ス タ ン		1	1										1				1	1		5
台 湾		1	2	1	1															5
ラ オ ス				1		1	1	1	1	1	1	1	1	1				1		10
マ レ ー シ ア					1				1	1	2								1	7
ク メ ー ル						1		1		1		1	1							5
ベ ト ナ ム								1												1
ア フ ガ ニ ス タ ン												1	1							2
シ ン ガ ポ ー ル												1			1					2
ネ バ ー ル													1							1
バ ン グ ラ デ シ ュ															2		1			3
ブ ラ ジ ル						1	2	2	2	1	1	2		2		1		1	2	15
キューバ														1	1					2
ウルグアイ															1	1				2
エクアドル				1																1
アルゼンチン						1		1												2
チ リ ー						1														1
メ キ シ コ						1	1	1		2									1	6
バラグアイ						1			1								1	1		5
コロンビア								1												1
ペ ル ー										1	1	1								3
コスタリカ											1									1
シ リ ア					1				1											2
ス ー ダ ン					1															1
トルコ				1																1
アラブ連合		1	2		2		1		1											7
合 計	6	9	9	7	9	8	7	12	11	13	14	14	10	8	9	10	8	8	12	184

農-6	コース名: 稲病害虫防除	定員 12名
-----	--------------	-----------

受入期間: 5.6.5.28~5.6.12.15

関係省庁: 農林水産省・文部省

受入機関: 兵庫県農業総合センター・神戸大学

国別応募状況:

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
バングラデシュ	1	1			
インド	2	1			
インドネシア	1	1			
マレーシア	2	1			
ネパール	1	1			
パキスタン	2	1			
フィリピン	1	1			
スリランカ	1	1			
タイ	2	2			
中国	1	1			
ケニア	0	0			
ナイジェリア	2	0			
タンザニア	1	1			
ブラジル	0	0			

受入担当: 齊藤 宏

コーディネーター: 片岡 牧子

I 稲病虫害防除コース趣旨

本研修コースは、昭和48年度に開設され、開発途上国、特に食糧問題をかかえる東南アジア諸国において重要な位置を占める病虫害防除の理論および實際を、その農業普及に携わる技術者を対象に、講義、現場実習、実験、見学、討議、研修視察、旅行等を通じ研修を実施し、参加諸国の技術の近代化に貢献できる人材の育成を目的にしています。

本研修の企画および運営には、国際協力事業団が農林水産省はじめ関係諸機関と協議の上、これにあたり、発展途上国の稲病虫害防除技術の向上と当該分野の基本的な知識を付与することを目的とし、かつ当該諸国と我国とのカリキュラムは次のとおりです。

① 専門オリエンテーション

- イ) 日本の農業と問題点
- ロ) 日本の植物防疫に関する行政および研究体制
- ハ) 日本の農業普及組織について

② 稲作概説

③ 病虫害概説

④ 病害各論

⑤ 虫害各論

⑥ 農業及びその散布法

II 資格

- (1) 本国政府により推薦された者
- (2) 大学において、農学又は化学を専攻した者および同等の学力を有する者
- (3) 農業技術の普及および研究分野において、農業の使用に関し、3年以上

の経験を有する者

- (4) 年齢40才未満の者
- (5) 英語を自由に駆使する能力のある者
- (6) 7ヶ月間の研修に耐えうる健康体の者

Ⅲ 期 間

昭和56年5月28日から12月15日まで

Ⅳ 用 語

英語または日本語を英語に通訳して実施される。

Ⅴ 研修施設及び研究機関

当該研修コースの受入施設、機関名およびその所在地は次のとおりである。

主たる研修機関

- (1) 神戸大学農学部

兵庫県神戸市灘区六甲台町1

- (2) 兵庫県農業総合センター、農業試験場

兵庫県明石市北王子町365 他

Ⅵ 研修員受入定員 12名

Ⅶ 研修指導者 鈴木直治氏

研修実施日程

5 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
5/1	金				
2	土				
3	日				
4	月				
5	火				
6	水				
7	木				
8	金				
9	土				
10	日				
11	月				
12	火				
13	水				
14	木				
15	金				
16	土				
17	日				
18	月				
19	火				
20	水				
21	木				
22	金				
23	土				
24	日				
25	月				
26	火				
27	水				
28	木	研修員来日			T.I.C
29	金	"			"
30	土	"			"
31	日	"			"

6 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
6/1	月	オリエンテーション (1)			T . I . C
2	火	〃 (2)			〃
3	水	〃 (3)			〃
4	木	〃 (4)			〃
5	金	〃 (5)			〃
6	土				
7	日				
8	月	大使館登録			〃
9	火	専門オリエンテーション (1)	農林水産省		農林水産省
10	水	〃 (2)	〃		〃
11	木	東京→神戸(移動) HICブリーフィング	兵庫センター		兵庫センター
12	金	外人登録、銀行口座開設等	〃		〃
13	土	日本語集中講座 (1)	神戸YWCA		〃
14	日				
15	月	日本語集中講座 (2) 兵庫県庁表敬訪問	兵庫センター 兵庫県庁		〃
16	火	研修指導機関表敬	兵庫県農業 総合センター		明 石
17	水	日本語集中講座 (3)	神戸YWCA 兵庫センター		兵庫センター
18	木	苗の準備と移植	兵庫県農業 総合センター	山根国男	明 石
19	金	日本語集中講座 (4)	神戸YWCA		兵庫センター
20	土	〃 (5)	〃		〃
21	日				
22	月	〃 (6)	〃		〃
23	火	〃 (7)	〃		〃
24	水	稲病虫害防除概説(講義)	コースリーダー	鈴木直治	〃
25	木	日本農業の現状 (〃)	兵庫県農業 総合センター	藤村良	〃
26	金	日本の稲栽培 (〃)	〃	越生博次	〃
27	土				
28	日				
29	月	水田における窒素循環(講義)	兵庫県農業 総合センター	渡辺和彦	〃
30	火	アジア・太平洋地域における 食糧・農業の現状 (〃)	農業技術研究所	富田豊雄	〃

7 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
7/1	水	アジア・太平洋地域における 食糧・農業の現状 (講義)	農業技術研究所	富田豊雄	兵庫センター
2	木	稲の生理 (")	"	太田保夫	"
3	金	水田の土壌 (")	京都大学	久馬一剛	"
4	土				
5	日				
6	月	日本の主要病害虫 (1) (")	兵庫県農業 総合センター	藤本 清	"
7	火	" (2) (")	"	神納 浄	"
8	水	主要病害虫の発生予察方式(1)(")	"	山口福男	"
9	木	" (2)(")	"	松尾綾男	"
10	金	" (3)(")	"	山下優勝	"
11	土				
12	日				
13	月	稲白葉枯病 (講義)	中国農業試験場	江塚昭典	兵庫センター
14	火	" (培地調製)(")	兵庫県農業 総合センター	松尾綾男他	明 石
15	水	" (試料採取)(")	"	"	三 田
16	木	" (流しこみ)(実習)	"	"	明 石
17	金	" (ブラックカウント)(")	"	"	"
18	土				
19	日				
20	月	昆虫の薬剤抵抗性 (講義)	名古屋大学	斎藤哲夫	"
21	火	抵抗性害虫の検定 (1) (実習)	兵庫県農業 総合センター	河野 哲	
22	水	" (2) (")	"	"	"
23	木	" (3) (")	"	"	
24	金	稲白葉枯病薬剤散布	"	坂本 庵	三 田
25	土				
26	日				
27	月	カンントリーレポート発表会 (1)		鈴木直治	兵庫センター
28	火	" (2)		"	"
29	水	病害防除概説 (講義)	神戸大学	宮本雄一	"
30	木	防除機械 (")	"	西村 功	"
31	金	" (")	"	"	"

8 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
8/1	土				
2	日				
3	月	農薬散布機械 (実習)	神戸大学	西村 功	神戸大学
4	火	"	"	"	"
5	水	"	"	"	"
6	木	害虫の同定 (講義)	"	奥谷 禎一	兵庫センター
7	金	" (実習)	"	"	神戸大学
8	土				
9	日				
10	月	" (")	"	"	"
11	火	夏期休暇			
12	水				
13	木				
14	金				
15	土				
16	日				
17	月	イモチ病室内実験 (実習)	神戸大学	松中 昭一	神戸大学
18	火	"	"	"	"
19	水	"	"	"	"
20	木	稲白葉枯病薬剤散布 (2) (")	兵庫県農業 総合センター	坂本 庵	三 田
21	金	稲用除草剤の選択毒性 (")	神戸大学	松中 昭一	神戸大学
22	土	"	"	"	"
23	日				
24	月	"	"	"	"
25	火	雑草の総合防除 (講義)	"	"	兵庫センター
26	水	残留農薬分析 (実習)	"	切 貫 武代司	神戸大学
27	木	"	"	"	"
28	金	"	"	"	"
29	土				
30	日				
31	月	イモチ病の発生予察 (講義)	東北農業試験場	鈴木 穂 積	兵庫センター

9 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
9/1	火	稲ウイルス病 (1) (講義)	植物ウイルス研究所	斎藤 康夫	兵庫センター
2	水	" (2) (")	九州農業試験場	新海 昭	"
3	木	熱帯の害虫 (")	農業技術研究所	服部 伊楚子	"
4	金	ネモトーダ (")	農事試験場	稲垣 春郎	"
5	土				
6	日				
7	月	東北地方研修旅行			
8	火	1. 東北農業試験場他			
9	水				
10	木				
11	金				
12	土				
13	日				
14	月	農業機械会社(見学)	有光工業		大阪
15	火	(敬老の日)			
16	水	稲用農薬 (講義)	コースリーダー	鈴木 直治	兵庫センター
17	木	害虫の同定及び病原菌の分離 (1) (実験)	兵庫県農業総合センター	松尾 綾男他	明 石
18	金	" (2) (")	"	"	"
19	土				
20	日				
21	月	" (3) (")	"	"	"
22	火	" (4) (")	"	"	"
23	水	(秋分の日)			
24	木	" (5) (")	"	"	"
25	金	" (6) (")	"	"	"
26	土				
27	日				
28	月	中間検討会	コースリーダー	鈴木 直治	兵庫センター
29	火	イモチ病菌レース (講義)	農業技術研究所	山田 昌雄	"
30	水	病害虫巡回調査 (実習)	兵庫県農業総合センター	松尾 綾男他	加 西

10 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
10/1	木	昆虫の生理のカレント・トピックス	農業技術研究所	三 橋 淳	兵庫センター
2	金	昆虫不妊化の "	名古屋大学	伊 藤 嘉 昭	"
3	土				
4	日				
5	月	セジロ・トビロウソク (1)	三 重 大 学	岸 本 良 一	"
6	火	" (2)	"	"	"
7	水	稲白葉枯病防除効果調査 (実習)	兵 庫 県 農 業 総 合 セ ン タ ー	坂 本 庵	三 田
8	木	発生予察被害調査法 (1) (講義)	"	松 尾 綾 男	兵庫センター
9	金	" (2) (")	"	山 下 優 勝	"
10	土	(体育の日)			
11	日				
12	月	沖縄地方研修旅行			
13	火	1. 沖縄県農業試験場 他			
14	水				
15	木				
16	金				
17	土				
18	日				
19	月	水田雑草の防除 (講義)	兵 庫 県 農 業 総 合 セ ン タ ー	山 根 国 男	兵庫センター
20	火	" (")	"	"	"
21	水	病害虫巡回調査 (実習)	"	松 尾 綾 男 他	淡 路
22	木	稲用農薬 (講義)	コースリーダー	鈴 木 直 治	兵庫センター
23	金	稲菌核病 (")	農業技術研究所		"
24	土				
25	日				
26	月	稲紋枯病 (")	中国農業試験場	堀 真 雄	"
27	火	熱帯病害のカレントトピックス (講義)	熱 帯 農 業 研 究 セ ン タ ー	梶 原 敏 治	"
28	水	ライスセンター等 (見学)	兵 庫 県 農 業 総 合 セ ン タ ー	山 根 国 男	"
29	木	農薬の空中散布 (講義)		後 藤 和 夫	"
30	金	稲穂枯病 (講義)	農業技術研究所	大 畑 貫 一	"
31	土				

11 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
11/1	日				
2	月	農業機械会社 (見学)	久保田鉄工株式会社		大 阪
3	火	(文化の日)			
4	水	マイコプラズマ病 (〃)	植物ウイルス研究所	杉 浦 巳代治	〃
5	木	東京地方研修旅行			
6	金	1. 野鼠防除 (講義)			
7	土	(筑波大学 草野)			
8	日	2. 農業技術研究所 他			
9	月				
10	火				
11	水				
12	木				
13	金				
14	土				
15	日				
16	月	国際検疫 (講義)	神戸植物防疫所	二 木 信 春	兵庫センター
17	火	国内検疫 (〃)	〃	水 流 照 男	〃
18	水	稲ウイルス媒介昆虫と防除 (〃)	農業技術研究所	桐 谷 圭 司	〃
19	木	総合防除 (〃)	〃	〃	〃
20	金	〃 (〃)	〃	〃	〃
21	土				
22	日				
23	月	(勤労感謝の日)			
24	火	神戸植物防疫所 (見学)	神戸植物防疫所		神 戸
25	水	昆虫の密度測定 (講義)	京 都 大 学	久 野 英 二	兵庫センター
26	木	貯 穀 害 虫 (〃)	岡 山 大 学	吉 田 敏 治	〃
27	金	微生物殺虫剤 (〃)	九 州 大 学	鮎 沢 啓 夫	〃
28	土				
29	日				
30	月	昆虫の生理活性物質 (講義)	京 都 大 学	高 橋 正 三	〃

12 月

月/日	曜日	研 修 項 目	研修指導機関	講 師	研修実施場所
12/1	火	研修旅行			兵庫センター
2	水	広島（佐竹製作所）他			〃
3	木				
4	金				
5	土				
6	日				
7	月	稲用農業（講義）	コースリーダー	鈴木直治	兵庫センター
8	火	研修総括	〃	〃	〃
9	水	最終評価会	〃	〃	〃
10	木	ファイナルレポート作成			〃
11	金	閉講式			〃
12	土	神戸 → 東京（移動）			T . I . C
13	日	帰国準備			〃
14	月	〃			〃
15	火	最終帰国日			〃

担当の所見

本コースは、伝統もあり、年々充実の度を深めているので、プログラムについては問題はない。

研修について、今年は態度に若干問題のある者も居たが、講師及び見学・実習受入先に迷惑をかけるほどのものではなかった。中には、研修意欲の低い者もみられたが、総体的には、大体熱心であった。

研修受入機関は、数年来の経験もあり、特に検討する点はない。

生活面では、他人の迷惑をかえりみない者もみられ、研修員間の折合いのよくない点も感じられた。

研修コース改善調査調書（最終報告）

（コース名 稲病害虫防除）

1 総括

研修員個々の持つバックグラウンド、国情、目的が必ずしも同一ではなく、また、日本の病害虫防除の技術を直接適用できる状態でないため、先端技術を学びたいというより、基本的でかつ、直接利用できる技術や情報の修得が今回の研修員の希望であった。そのため、高度な研究に関する講義よりも、自ら体得できる実習、実験、見学を通じて、講義で得た知識を確立する方法がより効果的であったようだ。一方、更に高度な研究を望む者に対しての道を開くことも必要である。また、研修を補助する参考資料等はできるかぎり充実させたいし、教材としてのスライドの作成も不可欠である。日本滞在中の研修のみならず、帰国後に種々の情報を伝達することも含めて、フォローアップを強化していく事も、長い目で見た研修として、望まれるところである。

2 講義

- | | 希望人数 |
|--|------|
| ・ 時間の有効利用の為に英語で話される講師が望ましい。 | 2 |
| ・ 日本と各国の農業事情、研究目的には相違があるので、主に熱帯に関係があり、帰国後の参考となるテーマを多く取り入れてほしい。（国際機関から講師を招へいすることも一案である） | 2 |
| ・ 農業経済に関する講義も役に立つと思われる。 | 1 |

3 実習・見学

- | | |
|--|---|
| ・ 実験、実習等、実用的で、帰国後直接役に立つものをどんどん増やしてほしい。 | 6 |
| ・ 筑波学園都市での見学をもっと時間をとってほしい。 | 3 |
| ・ 東北農業試験場では見学だけでなく実験、実習等行ないたい。 | 3 |
| ・ 病害虫発生予察、実習に力を入れてほしい。 | 3 |
| ・ 講義とタイアップした実験を行なえば理解しやすい（フェロモン、微生物防除 etc） | 1 |
| ・ 発生予察に欠かせない情報源である気象台を見学したい。 | 2 |

4 厚生活動

- | | |
|-----------------------------|---|
| ・ リクリレーション活動をもっと活発に企画してほしい。 | 1 |
| ・ 日本語の勉強をもっと長くやりたい。 | 1 |

- 5 生活一般
- 共同利用のキッチンがあれば、長期間の滞在でも食事に困らなくて済むので是非考慮してほしい。 2
- 6 今後の方針
- 日本での研修だけでなく、帰国後の研究、普及活動に利用できる病害虫のカメラスライド、図鑑、機器等は貴重で是非ほしい。 9
 - この分野に関する専門家の派遣も含めて、帰国後のフォローアップを強化してほしい。 2
 - 今後も専門分野の最新情報を、定期刊行物や研究論文などで提供してほしい。 9
 - コースの期間について : 稲の栽培技術も含め、スタートを早くに(4月)期間をのばしてほしい。 3
 - : 集中講義方式にして、短かくしてほしい(12月をカットして6ヶ月位に) 2
 - 研修員各々の研究、興味、国情 etc まちまちなので、少なくとも病理、昆虫のグループに分けるなどして、ニーズに合わせれば、効果が更に上がるものと考え。 (個別コースも検討してほしい) 3
 - 単に知識を一方向的に与えるだけでなく、テストなどをして、研究度をチェックすれば、個々の意欲も強まるのではないか。 3
 - コースの終了時に何らかの証明書以上の、学位のようなものが取れるようになれば、コースのレベルアップにもつながるのではないか。 3

農-7	コース名： 農業機械整備	定員 10名
-----	--------------	-----------

受入期間： 56.6.11~56.12.21

関係省庁： 農林水産省

受入機関： (社団法人)日本農業機械工業会

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
バングラデシュ	2	1			
インド	3	1			
インドネシア	3	1			
マレーシア	3	1			
ネパール	1	1			
パキスタン	2	1			
フィリピン	0	0			
タイ	1	1			
中国	0	0			
スーダン	1	1			
ブラジル	2	1			
パラグアイ	1	1			
ザンビア	1	0			

受入担当： 斉藤 宏

コーディネーター： 清水 勝男・山口 耕平

1 総 説

(1) 沿 革

農業機械整備コースは、昭和42年の第1回の集団研修コースから数えて、本年度で第15回目の研修を終え、その間の参加研修員は、28ヶ国169名に達した。

研修コースの内容は、わが国の農業機械の改良発展と多様化にともない、改善を重ね、当初はエンジンおよび耕耘機を中心とした研修であったが、現在では、その他に田植機、コンバイン、四輪トラクター等の広範囲な研修内容となっている。研修内容の変化につれ、コース名も当初の農機具整備コースを、昭和47年度には農業機械整備コースと改称し、現在に至っている。

しかし、農業機械の主要構成部分はエンジンであり、その理論と整備実習に関する研修がプログラムの主要な部分を占めていることは言うまでもない。

(2) コースの目的

本コースは、開発途上国における農業機械の整備、指導機関において、技術分野の管理指導に従事する者を対象に、主として稲栽培に使用される各種農業用原動機、農業機械の整備、保守に関する技術と簡単な修理技術を修得させ、農業機械整備技術の向上をはかることを目的としたものである。

(4) 研修の概要

本コースの研修計画は主として、稲栽培に使用される各種農業用原動機を中心に、作業機や調整加工機の保守、管理ならびに簡単な修理技術を修得できるように講義、工場実習、見学等の組合せによる計画を立てた。各項目毎の単位数は昨年とはほぼ同様である。

(イ) オリエンテーションおよび日本語教育

来日時には、同時期に来日した他の研修コース研修員と一緒に日本の文化、政治、経済、地理等の紹介と、日常生活に必要な知識（通信の仕方、交通機関の利用方法、買物等）を説明し、支障なく滞日生活をすごせるようガイダンスを与えた。

来阪時には、研修計画全体についての詳細な説明を行い、研修の方法や目的等に関してお互いの確認をとり、円滑な研修実施をはかった。

又、研修員より日本語を学びたいとの要望があったので、合計1.8時間、9回にわたり日本語講座を実施した。初めての試みである。概ね、好評であった。

(ロ) 研 修

① 講 義

来日直後、日本の農業機械生産に関し農林水産省、日農工の担当者から全体的な講義を受ける。

来阪後は、各種農業機械に共通する材料とその加工法、機械要素などにつき講義を受け、機種毎の講義はメーカーでの実習に先がけて、それぞれについて全般的な予備知識を与え、効果的な実習を行えるように計画した。

⑩ 実 習

農業機械用各種エンジン、ポンプ、各種農業機械、作業機等の分解・組立及び調整などの実習を3日～14日間の期間で各メーカー講習所にて担当者の指導を受けて実施した。

⑪ 見 学

大阪府農林技術センターをはじめ、農業機械メーカー、作業機メーカー、農業関係施設、その他農業機械整備に関連する設備等の見学をし、農業機械化と機械整備についての全体的な知識の修得を目的として実施した。

⑫ 総 括

i) 検討会（中間及び最終検討会）

専門研修実施に先がけ、来日直後及び来阪直後に、本コースの目的と研修課程について説明し、その中で中間検討会の実施については了承を得ている。中間検討会は、新しく出された要望等を、後半の研修に生かすために行われた。

また、全研修を終えた後に、研修員と関係者が集まり、最終検討会を開き、研修や大阪国際研修センターでの生活等につき意見を交換した。

ii) 研修レポート（テクニカルレポート及びファイナルレポート）

テクニカルレポートは、研修内容の把握がどの程度であるか、また、帰国後受講内容をどのように活かせる可能性があるかを知るため提出させた。12月16日にコースリーダーの川村教授指導の下にテクニカルディスカッションを行い、理解を確めた。

又、ファイナルレポートは、研修内容の評価と改善等についての提言、帰国後の業務計画、その他一般的な印象に関するものである。

iii) 閉 講 式

コースリーダー、関係各社からの関係者、講師の方々の出席を得て大阪国際研修センターで建設施工コースと合同で行い、研修員には修了証書を授与した。

iv) 研修員の状況

ブラジル研修員 Mr. Santiago をのぞく全員、閉講式終了後1週間以内に帰国の途についた。Mr. Santiago からは、本国の所属機関において開かれる重要会議に出席するため、早期帰国の希望が出された。本研修員の帰国の要望が強いこと、本コースの重要項目はすでに履習していることを考え、これを認めることとした。本研修員は12月11日に離日した。インド研修員 Mr. Lohan はマラリアのため、約20日間研修を休んだが、本人および関係者の努力により、所期の成果をあげたものと思われる。他の研修員の中にも、病気を患う者もいたが大事に至らず研修を終えることができた。

2. 研修日程

月	日	曜日	研修項目	研修場所	職名	講師
6	11	木	来 日			
	12	金	ブリーフィング			
	13	土				
	⑭	日				
	15	月				
	16	火	JICAオリエンテーション	T I C		
	17	水				
	18	木				
	19	金				
	20	土				
	⑳	日				
	22	月	(L) 日本農業機械化施策	農 林 水 産 省		
	23	火	(L) 農業機械生産及び輸出の現状	農 林 水 産 省 日 農 工		
	24	水	(L) 農業機械化研究所の役割と 国営検査	(大 宮)		
	25	木	(O) 農林水産省内原研修所	(内 原)		
	26	金	(O) 筑波国際農業研修センター 久保田鉄工筑波工場			
	27	土	来 阪			
	㉑	日				
	29	月	プログラムオリエンテーション及び テスト	O I T C	京都大学教授	川村 登
	30	火	(O) 大阪府農林技術センター	同 左	栽培部長	村田利男
7	1	水	(L) 農業機械利用と稲栽培法	O I T C	"	"
	2	木	(L) 農業機械材料と加工法(I)	"		川村 登
	3	金	(L) ディーゼルエンジン一般	"		村田利男

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
7	4	土				
	⑤	日				
	6	月	(P) 農用小型ディーゼルエンジンの分解整備等の実習 (10日間)	ヤンマーディーゼル株式会社 滋賀生産事業所 (長浜)		
	7	火				
	8	水				
	9	木				
	10	金				
	11	土				
	⑫	日				
	13	月				
	14	火				
	15	水	"	"		
	16	木				
	17	金				
	18	土				
	⑬	日				
	20	月	(P) 多気筒ディーゼルエンジンの分解整備等の実習(4日間)	ヤンマーディーゼル株式会社 滋賀生産事業所 (長浜)		
	21	火				
	22	水				
	23	木		ヤンマーディーゼル株式会社 尼崎工場		
	24	金	(L) 電気着火エンジン一般	O I T C		村田利男
	25	土				
	⑭	日				
	27	月	(L) 機械要素	O I T C		川村 登

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
7	28	火	(L) 工場管理	O I T C	大阪府立 産業能率研究所	小島敏彦
	29	水	(L) 燃料及び潤滑油、グリース等	"	大阪府立大学教授	梅田重夫
	30	木	(O) 燃料及び潤滑油の試験法	丸善石油(堺)		
	31	金	(L) 農業機械材料と加工法(Ⅱ)			川村 登
8	①	土	(国際協力事業団創立記念日)			
	②	日	移動(→松本)			
	3	月	(P) 電気着火空冷エンジン分解 整備等の実習(5日間)	石川島芝浦機械 ㈱ (松本)		
	4	火				
	5	水				
	6	木				
	7	金				
	8	土				
	⑨	日				
	10	月	カントリーレポート	O I T C		川村 登
	11	火	(L) 農業と防除	"	神戸大学教授	西村 功
	12	水	夏 休 み			
	13	木				
	14	金				
	15	土				
	⑩	日	移動(→刈谷)			
17	月	(P) トラクタ用電装部品分解整備 の実習(5日間)	日本電装㈱ (刈谷)			
18	火					
19	水					
20	木					

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
8	21	金	(P) トラクタ用電装部品分解整備 の實習	日本電装(株) (刈谷)		
	22	土				
	(23)	日	移動(→明石)			
	24	月	(P) 2サイクル高速回転エンジンの 分解整備等實習(5日間)	川崎重工業(株) 発動機事業部 (明石)		
	25	火				
	26	水				
	27	木				
	28	金				
	29	土				
	(30)	日				
	31	月	中間テスト	O I T C		川村 登
9	1	火	(L) 日本における農業機械利用の現状	"	農林水産省	
	2	水	(L) 日本における農業機械化とその施策	"	"	
	3	木	中間検討会	"		
	4	金	(L) 耕耘機一般	"		梅田重夫
	5	土				
	(6)	日				
	7	月	(L) トラクター一般 (I)	O I T C	京都大学教授	田中 孝
	8	火	(L) " (II)	"	"	"
	9	水	(L) トラクター及び作業機	"		村田利男
	10	木	(L) 田植機一般	"		西村 功
	11	金	(L) 収穫機一般	"		川村 登
	12	土				
	(13)	日				

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
9	14	月	(O) 大中之湖干拓地	滋賀県農業試験場 (大中)		
	(15)	火	(敬老の日)			
	16	水	(P) 歩行型トラクター、乗用型トラクター及び収穫機の分解整備等の実習(14日間)	久保田鉄工(株) 堺製造所(堺)		
	17	木				
	18	金				
	19	土				
	(20)	日				
	21	月	" " " "	" "		
	22	火				
	(23)	水	(秋分の日)			
	24	木	" " " "	" "		
	25	金				
	26	土				
	(27)	日				
28	月	" " " "	" "			
29	火					
30	水	" "	" "			
10	1	木				
	2	金				
	3	土				
	(4)	日				
	5	月	" " " "	" "		
	6	火				
	7	水	(L) 土壌と耕耘一般	O I T C		川村 登

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
10	8	木	(L)ワラ・牧草収穫機一般	O I T C	京都大学助教授	並河 清
	9	金	(L)施肥・播種・除草用機械一般	"		梅田重夫
	⑩	土	(体育の日)			
	⑪	日	移動(→名張)			
	12	月	(P)トラクター用作業機の分解整備と圃場実習(4日間)	高北農機(株) (名張)		
	13	火				
	14	水				
	15	木				
	16	金	(O)バッテリーの製造工程	日本電池(株) (京都)		
	17	土				
	⑬	日				
	19	月	(P)防除機の分解整備実習 (3日間)	有光工業(株) (大阪)		
	20	火				
	21	水				
	22	木	(L)農用動力ポンプ	O I T C		並河 清
	23	金	(L)灌漑排水一般	O I T C	近畿大学教授	高橋一郎
	24	土				
	⑮	日				
	26	月	(L)電動機一般	O I T C		並河 清
	27	火	(L)乾燥機一般	"	京都大学教授	山下律也
	28	水	(O)耕耘爪,刈り製造工程	東亜重工(株) K.K.I.M.T(三木)		
	29	木	(L)穀摺機・精米機一般	O I T C		山下律也
	30	金	(P)稲収穫圃場実習	京都大学高槻農 場(高槻)		
	31	土				

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
11	①	日	移動（→筑波）			
	2	月	(P) 収穫調整用機械及びトラクタ の分解整備の実習 (5日間)	井関農機㈱ (筑波)		
	③	火				
	4	水				
	5	木				
	6	金				
	7	土				
	⑧	日				
	9	月	(P) 農用動力ポンプの分解整備 の実習 (5日間)	㈱西島製作所 (高槻)		
	10	火				
	11	水				
	12	木				
	13	金				
	14	土				
	⑮	日	移動（→広島）			
	16	月	(P) 乾燥機・精米機の整備・調 整の実習 (5日間)	㈱佐竹製作所 (東広島)		
	17	火				
	18	水				
	19	木				
	20	金				
	21	土				
	⑳	日				
	㉑	月	(勤 労 感 謝 の 日)			
24	火	(L) 日本における中古農業機械 市場の現状	O I T C	農業機械公正取引 協議会専務理事	阿 部 弘	

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
11	25	水	(P) 農業機械試験及び測定法	京 都 大 学		
	26	木	(O) トラクター及び作業機の製造工程	佛 東 洋 社 (滋 賀)		
	27	金	(L) 農業機械利用と経済性	O I T C		村田利男
	28	土				
	⑳	日				
	30	月	(P) 溶 接 実 習 (5 日 間)	佛 神 戸 製 鋼 所		
12	1	火				
	2	水				
	3	木				
	4	金				
	5	土				
	⑥	日				
	7	月	(L) 農業機械技術の今後の動向(I)	O I T C		村田利男
	8	火	(O) 整備システム工場	日産自動車佛 (大 阪)		
	9	水	(L) 農業機械技術の今後の動向(II)	O I T C		川村 登
	10	木	(O) 農業機械整備工場	亀 岡 農 協 (京 都)		
	11	金	(L) 労務管理	O I T C		小島敏彦
	12	土				
	⑬	日				
14	月	(O) 建設機械製造工程	佛 小 松 製 作 所 (枚 方)			
15	火	レポート作成と帰国準備				
16	水	テクニカルディスカッション				
17	木	最終検討会				
18	金	閉 講 式				

月	日	曜日	研 修 項 目	研 修 場 所	職 名	講 師
12	19	土				
	20	日				
	21	月	最終帰国日			

3. 研修員最終報告書要約

Mr. Mansur Rahman (バングラデッシュ)

1. 研修コースに対する評価

東京でのオリエンテーションは、私の日本および日本人についての知識を深め広めてくれた。農水省および日農工の講義では、日本の農業機械化について多くを学んだ。バングラデッシュでは小型ディーゼルエンジンがよく使われていること、私自身かんがい用ポンプのディーゼルエンジンの整備にあたっていることもあり、ヤンマーディーゼル(株)における小型ディーゼルエンジンの研修は有意義であった。日本電装(株)での電装品の研修は自分の専門外ではあるが興味深かった。(株)西島製作所でのポンプの研修は自分の仕事と直接関連しており、多くを学ぶことができた。

2. 研修コース改善のための提言

研修プログラムはよく計画組織されているが、(株)東洋社で2～3日実習させていただければありがたい。

3. 帰国後の計画

本研修から得た知識・技術を技術者の訓練に役立てたい。

4. 国際協力事業団に対する要望

農機整備機材の供与およびバングラデッシュからの受入研修員数の増加をお願いしたい。

Mr. Francisco Julio Farias Santiago (ブラジル)

1. 東京でのオリエンテーションは役に立った。民間企業での研修では、

ヤンマーディーゼル㈱、高北農機㈱、㈱西島製作所から多くを学んだが全体的にみて、このコースは自分には向いていなかったようだ。

2. 日本語集中講座および北海道研修旅行を研修プログラムに入れていただきたい。
3. ブラジルと日本では農業の規模、土壌等が大きく異っているので、応用には問題が多い。
4. 特にない。

Mr. Hawa Singh Lohan (インド)

1. 全般的にみて研修プログラムはよくできていた。東京でのオリエンテーションでは日本について多くを学ぶことができた。農水省での「日本農業と日本農業に対し機械化の果たした役割」についての講義も参考になる点が多かった。民間企業での研修では、ヤンマーディーゼル㈱、高北農機㈱、井関農機㈱、㈱西島製作所の研修が実際的で有用であった。また、大中之湖干拓地への見学旅行も、地方における農業を見る機会となり有益であった。㈱東洋社、日産自動車㈱、亀岡農協および㈱小松製作所の見学もそれぞれ最新型農機具、新しい修理法、農協のシステム、大型建設土木機械を知る機会となった。
2. 講義はできるかぎり英語で実施していただきたい。エレクトロニクス、安全装置についての研修をふやしてほしい。北海道への研修旅行を研修に含めてはどうかと思う。
3. 農繁期の人手不足を、田植機やコンバインの導入により解消したいと

思うが、稲の品種が異なるので問題点も多くあると思う。ターボチャージャーを組込んだ省エネ型トラクターの開発を関係者に提言したい。

4. 各研修参加国の条件に適したコンバインおよび田植機の開発の促進を関係者をお願いしていただきたい。農業機械化についての新情報を提供してほしい。再研修コースの実施をお願いしたい。インドからの受入研修員の数を増やしていただきたい。

Mr. Lily Slamet (インドネシア)

1. 東京でのオリエンテーションは有益であった。日本語講座(夜間正味2時間×9回)は短かすぎた。カントリーレポートは各国事情を交換し合う場となり、参考となるどころ大であった。講義・実習共良かった。
2. 工場見学は騒音の中で、あわただしく終りがちであった。一考を要すると思う。
3. 修得した知識・技術を自分の仕事に活かしたい。
4. 農業機械についての最新情報を載せた雑誌等の送付をお願いしたい。

Mr. Sutarmin Tarigan (インドネシア)

1. 研修施設およびプログラムは共に適切であった。田植機、ポンプ、ティラー等から農産物のマーケティング等、関係分野までカバーされていた。
2. 民間企業での研修の中には重複するものがあった。再調整をお願いしたい。

3. 修得した増収技術、整備技術、かんがい技術の普及に努力したい。
4. 最新技術に関する情報を提供していただきたい。再研修（2ヶ月程度）をお願いしたい。

Mr. Miskan Bin Sukir （マレーシア）

1. ヤンマーディーゼル㈱での研修は、ディーゼルエンジンについての理解度を大いに深めた。日本電装㈱でのオルタネイター、スターター等の研修は帰国後役立つ点が多いと思う。川崎重工業㈱では、産業ロボットの製造が興味深かった。高北農機㈱での実習は、自分の専門とも関連が深く、農機具の整備技術の向上に役立つと考えられる。東亜重工㈱では工場が少人数で、配置よく効率的に運営されているのが印象深かった。
2. 講義はできるだけ英語で実施していただきたい。日本語クラスの時間数を増やしていただきたい。各研修項目についての研修先を毎年、変えてはどうか。研修先の中にはマンネリ化のためか研修が形式的になっているものもあった。
3. 修得した知識技術を、後進の育成に活かしたい。
4. カットモデル等、研修教材を供与していただきたい。

Mr. Krishna Bahadur Khatri （ネパール）

1. 研修プログラムは系統だててよく組織されていた。ヤンマーディーゼル㈱、石川島芝浦機械㈱、川崎重工業㈱での研修で、エンジンの操作、取扱、修理の面で自信がついた。また、調整法、点検法等についても学

んだ。久保田鉄工㈱ではトランスミッション関係について学んだ。高北農機㈱では各種作業機の装着・調整について多くを学んだ。井関農機㈱での研修では、コンバインが目新しく、理論面、実際面共に深く学んだ。㈱佐竹製作所での精米機、乾燥機、もみすり機の研修も自分にとって目新しいものであった。

2. テキスト類の整備をお願いしたい。講義は出来るかぎり英語で実施していただきたい。
3. 後進の育成に尽力したい。㈱西島製作所で修得した知識を、掘抜き井戸用ポンプの操作に活用したい。
4. 技術文献を定期的を送付願いたい。3～4年後、再研修をお願いしたい。田植機およびコンバインを無償供与していただきたい。

Mr. Abdul Ghafoor Ansari (パキスタン)

1. 自国では機械に自分自身ふれることはないが、日本での研修では実際に機械にふれながら学ぶので、わかり易かった。特にヤンマーディーゼル㈱、石川島芝浦機械㈱、久保田鉄工㈱、日本電装㈱での研修が学ぶところが多かった。また井関農機㈱では、コンバインの自動制御、ターボチャージャー、スーパーチャージャー、油圧機構による速度自動制御等新技術を学んだ。
2. 研修実施時期を早めて、代かきの時期から収穫調整加工の時期まで含めていただけたらと思う。大規模農業の実際を見るため北海道への研修旅行をプログラムに入れていただきたい。

3. 農業機械工場、掘抜き井戸工事の指導・管理の仕事にたずさわることになっている。日本で得た知識・技術を自分の仕事に活かしたい。
4. 以下の農業機械の供与をお願いしたい。六条刈自走式乗用型田植機、中型もみすり機、精米機、穀粒サンプリング機。2～3年後に、再研修をお願いしたい。O I T Cのキッチン設備の充実をお願いしたい。バドミントン施設を作っていただきたい。

Mr. Aurelio Zarate Chavez (パラグアイ)

1. 民間企業での研修の中では、ヤンマーディーゼル㈱、久保田鉄工㈱、高北農機㈱、井関農機㈱の研修が実習もあり満足いくものであった。
2. 各研修員のニーズに沿ったプログラムの設定をお願いしたい。私の国では日本と条件がちがうため、あまり実際的でない研修も多かった。例えば、粗放農業コースと集約農業コースに分けるのも一案ではないかと思われる。研修内容を多様化するため四国や北海道での研修も含めていただきたい。農家の見学も学ぶところが多いと思う。
3. パラグアイは、まだ開発途上にあるため資機材・施設等が不十分であるが、本研修で得たものを活かす努力はしたい。
4. 特になし。

Mr. Mutwalli Dawoud Mohamed Badi (スーダン)

1. 研修プログラムはよく組まれていた。各研修所の設備は整っていた。専門用語についての通訳が不十分な場合があった。

2. 講義は出来るかぎり英語でお願いしたい。民間企業での研修の中には重複するものがあった。調整をお願いしたい。
3. 修得した正しい整備法により農機の寿命を延ばすべく努力したい。
4. 農業機械についての最新情報を提供していただきたい。上級整備工を対象とした、短期のトラクタ研修コースを設けていただきたい。

Mr. Mongkol Kwangwaropas (タイ)

1. 東京でのオリエンテーションは、日本での生活の導入部として適当であった。川村、山下、梅田の各教授の講義は素晴らしかった。民間企業での研修では井関農機㈱、㈱西島製作所のものが特に良かった。井関農機㈱の研修は、講師、教材、施設とも充実していた。また、㈱西島製作所では多くの知識・技術を得た。研修計画は綿密に組まれていた。
2. 多気筒ディーゼルエンジンおよびダイナモメーターの研修を増やしていただきたい。日本電装㈱での研修はすぐれたものであったが、期間が短かすぎた。日本電装㈱の講師にOITCで講義をしてもらい、日本電装㈱での実習時間を増やしたら充実した研修になると思う。井関農機㈱では、図表、マグネットシート、カットモデル等の教材を用いて効果的な研修が実施された。他の研修先でも補助教材を充実させられたらと思う。
3. 日本とタイでは、農業に共通点が多いので、日本製農業機械を活用できる範囲は広いと思う。あまり複雑でなく低価格のものがタイに合っていると思うので、その導入に努力したい。また、日本で得たものを、大

学での教育に活かしたい。農業機械技術者訓練コースを設置する計画もある。

4. タイ国からの受入研修員の数をややしていただきたい。最新技術情報の提供もお願いしたい。

4. 農業機械整備コース研修員受入実績

(人)

国名	年度	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	合計
アフガニスタン						1	1	1	1	1		1		1			7
バングラデシュ			1						2		2	1	1	2	1	1	11
ブラジル															1	1	2
ブータン						1	1	1	1								4
ビルマ											1		1	1	1		4
カンボジア								1	1								2
コロンビア												1					1
ドミニカ					1												1
エチオピア				1					1								2
フィリピン	2	3	2	3	2	2	2	3	3	1	1	2	2	1	2		29
グアテマラ				1													1
イラン				1	1	1					1		1				5
インド				1		1				1	1		1	2	1	1	9
インドネシア			1	2	2	1	2	1	1	2	1	1			1	2	17
ラオス	1				1		1	1	1								5
リビア											1						1
マレーシア	5	4		1		1	4	1	1	1	1	1	2	1	1	1	24
ネパール	1		1	1		1				1				1	1	1	8
パキスタン													1			1	2
パラグアイ																1	1
ペルー												1					1
サウジアラビア										1							1
スリランカ	1	1	1		1	1	1		2	1	2	1					12
スーダン																1	1
タンザニア														1	1		2
タイ	1	1	2	1	1	1						1	1	1	1	1	12
トルコ										1							1
ヴェトナム	1		1	1													3
合計		12	10	9	13	10	11	14	12	10	12	11	12	11	11	11	169

農-8	コース名： 生活改善普及	定員 8名
-----	--------------	----------

受入期間： 56. 6. 18~56. 8. 28

関係省庁： 農林水産省

受入機関： (社団法人)農山漁家生活改善研究会

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
バングラデシュ	3	1			
インド	1	1			
インドネシア	3	1			
マレーシア	1	1			
ネパール	1	1			
パキスタン	2	1			
フィリピン	2	1			
スリランカ	1	0			
タイ	2	1			

受入担当： 柳沢 香枝

コーディネーター： 飯島 恵子・寺西 朋子

昭和56年度 海外集団研修「生活改善普及コース」実施報告書

1. 本研修実施に至る経緯

日本政府においては、東南アジア、中近東、アフリカ、中南米における開発途上国の農業の発展を援助するため、農業指導者、農業技術者を対象に各種の研修コースを国際協力事業団を実施機関として開催しているが、その一環として、昭和55年度、初めて生活改善普及事業に関して「生活改善普及コース」を開催することとなり、昭和56年度も引き続き実施することになった。

昭和55年12月22日付をもって、東南アジア諸国、バングラデシュ、インド、インドネシア、マレーシア、ネパール、パキスタン、フィリピン、スリランカ、タイの9カ国に対し外務省が在外公館を通じ開催の通知を行った。

これについての参加申込みの提出期限は5月2日とした。その結果8カ国16人の参加申し込みがあった。そこで本コース開催の関係機関の者が参集し、研修員の資格条件（生活改善普及事業に従事している政府機関の職員、女性、英語の理解、会話能力を有する者、年齢は40才までの者を原則とする。）を考慮し、予算の範囲内において最終的に8カ国8人を決定した。

研修場所については、オリエンテーション及び日本語研修期間はJICAセンターにおいて本研修（生活改善普及事業）については、農林水産省生活改善技術研修館とし、期間は6月18日から8月28日の72日間にわたり実施した。この間日本語研修期間は1カ月であった。

農山漁家生活改善研究会においては、本研修の運営を農林水産省の指導のもとに国際協力事業団の委託を受けて実施した。

本コースについての実施概要（日本語研修をのぞく）は次のとおりである。

2. 研修計画の作成とそのねらい

研修内容の構成及び日程の編成等、研修計画の作成にあたっては、関係者が再三集り検討を行った。

研修内容の構成にあたっては、我が国の生活改善普及事業とその背景及びその過程から体系づけられた基礎的理論及び具体的内容を紹介することにより、生活改善の基本的姿勢の把握をねらい更に研修生各国の現状に即した活用がはかれることを考慮した。

(1) 研修内容

- 日本の生活改善普及事業の背景としての日本の農業の歴史と特徴
- 日本の農家生活の特徴と現状
- 生活改善普及事業の目標、歴史、組織
- 生活改善普及事業の予算と内容
 - 健康、環境、高齢者、農村婦人等への対策
 - 生活改善実行グループの活動、実験研究等
- 生活改善普及職員の任務と資格・研修
- 生活改善普及員の普及活動
- 生活改善技術の確立
- 現地における生活改善普及事業の状況

- 生活改良普及員の活動状況
- 農家生活と生活改善実行グループの活動の実際
- 生活改善施設の見学
- 被服，食物，住居，家庭管理，家族計画等，生活改善技術の内容
- 生活改善実行グループ全国連絡研究会会員との交流等

(2) 研修方法

- テキストによる講義を主とし，理解を深めるため，視聴覚教材を活用した。
- 具体的事例を通じての理解を深めるため，現地研修として，山口県下に赴き，直接現地活動に接する機会とした。
- 生活改善技術等については，実習，デモンストレーション等を通じ，技術の習得をはかった。
- 各国における生活改善普及事業の紹介・分析として，カンントリーレポートの発表・討議を行うため，ミーティングを実施した。
- 短期間における研修の効果を上げるため，各自が可能な範囲のプロジェクトを持ち，その内容の充実がはかられるよう，相互交換及び助言のためのミーティングを実施した。

3. 研修内容及び日程

月	日	曜	研修内容 午前(10:00~12:00) 午後(13:30~16:30)	研修場所	研修方法	ね ら い
6	18	木	米日			
	19	金				
	20	土				
	21	日				
	22	月				
	23	火				
	24	水	JICA オリエンテーション	TIC	オリエンテーション	
	25	木				
	26	金				
	27	土				
	28	日				
	29	月				
	30	火				
7	1	水	日本語研修	TIC	講 義	日常会話の基礎を身につける
	2	木				
	3	金				
	4	土				
	5	日				
	6	月				
	7	火				
	8	水	日本語研修	TIC	講 義	日常会話の基礎を身につける
	9	木				
	10	金				
	11	土				
	12	日				
	13	月				
	14	火				
	15	水	日本語研修	TIC	講 義	日常会話の基礎を身につける
	16	木				
	17	金				
	18	土				
	19	日				
	20	月	日本語研修	TIC	講 義	日常会話の基礎を身につける

月	日	曜	研修内容 午前(10:00~12:00) 午後(13:30~16:30)	研修場所	研修方法	ね ら い
7	21	火	日本語研修	T I C	講 義	日常会話の基礎を身につける
	22	水				
	23	木				
	24	金				
	25	土				
	26	(日)				
	27	月	オリエンテーション(塚本美恵子) 開講式(小池 和子)	生活改善 技術研修館	ミーティング	
	28	火	技術館見学(奥 泰光) ミーティング(塚本美恵子) 農水省訪問(塚本美恵子)	"	見学及び ミーティング	
	29	水	日本の農業(細谷 隆) 日本の農村生活(安孫子智恵)	"	講 義	日本の普及事業の背景を知る
	30	木	農業改良普及事業(井上 弘二) 生活改善普及事業(小池 和子)	"	"	農業改良普及事業, 生活改善普及事業 の概要を知る
	31	金	カンントリーレポート発表 (塚本美恵子・小池和子)	"	ミーティング	各国の生活改善普及事業について知る
8	1	土				
	2	(日)				
	3	月	生活改善普及事業の内容 (大島綏子・横山伸子)	生活改善 技術研修館	講 義	生活改善普及の内容と関連予算について知る
	4	火	都市の生活見学・くらしと文化	日本民芸館	見 学	現代の日本の都市のくらしと文化を知る
	5	水	生活改善普及職員の資格と任務 (今城 裕子) 生活改善普及職員の研修 (高橋多美恵)	生活改善 技術研修館	講 義	生活改善普及職員の資格・任務・研修 について知る
	6	木	生活改良普及員の活動(活動方法・ 普及計画グループ育成) (堀家 欣子)	"	"	生活改良普及員の活動内容を知る
	7	金	レポート指導・ミーティング (塚本美恵子・小池和子)	"	ミーティング	
	8	土				
	9	(日)				
	10	月	東京→山口(現地研修) (塚本美恵子・小池和子)	山 口 県	現地研修	
	11	火	県の生活改善普及事業 (伊豆 課長) 普及所の生活改善普及事業 (山本 所長)	"	"	現地における生活改良普及員の活動と 生活改善実行グループの活動を知る
	12	水	普及所の現地活動 (石田生活改良普及員) 生活改善実行グループの活動 (岡村生活改良普及員)	"	"	
	13	木	農家生活見学・実習 山口→京都	山口県・京都府	現地研修	
	14	金	京都の生活関連施設見学	京 都 府	"	

月	日	曜	研修内容 午前(10:00~12:00) 午後(13:30~16:30)	研修場所	研修方法	ね ら い
8	15	土	京都 → 東京			
	16	日				
	17	月	生活技術の概要 視聴覚教材 (岡野美樹子) (恩田 節)	生活改善 技術研修館	講 義	生活改善技術の概要と各項目の技術について知る
	18	火	被服 くらしと着物 (藤原 君子) (大塚 末子)	"	"	"
	19	水	家庭管理 食物 (安達 幸) (竹口はる子)	"	"	"
	20	木	食物実習 (市川佳代子)	女子栄養大学	実 習	"
	21	金	住居 生活改善実行グループ全国連絡研究 会との交流 (本多 修) (酒井かず子・ 鹿島阿夏・秋山みのる)	生活改善 技術研修館	講 義 ミーティング	生活改善技術の概要とグループの全国 組織と活動を知る
	22	土				
	23	日				
	24	月	ミーティング (塚本美恵子・小池和子) 家族計画 (近 泰男)	生活改善技術 研修館 家族計画国際 協力財団	ミーティング 講 義	家族計画について知る
	25	火	レポートまとめ・レポート交換発表 ・評価・反省 (塚本美恵子・小池和子)	生活改善 技術研修館	ミーティング	各自のレポートのまとめと発表, 反省, 評価を行う
	26	水	閉講式 懇親会 (小池 和子) (塚本美恵子)			
	27	木	帰国準備			
	28	金	帰国			

4. 研修の評価

評価事項と方法

生活改善普及事業とその背景, 普及活動の概要, 自国の問題と関連して研修全体を通じて, どの程度理解したかアンケートにより把握した。

また, ミーティング時における意見交換を行い, 研修の反省・評価を実施した。

(1) アンケートのまとめ

	日本の生活改善普及事業の背景			普及活動の概要			自国の問題と関連して			研修全体を通して		
	十分 理解した	理解した	やや不足	十分 理解した	理解した	やや不足	十分 役立つ	役立つ	役立てるに はやや不足	大 変 よかった	良かった	普通
1	○					○	○				○	
2	○			○				○			○	
3	○			○				○		○		
4	○			○				○		○		
5	○			○				○		○		
6	○			○			○			○		
7	○				○		○			○		
8		○			○			○			○	
計	7	1		5	2	1	3	5		5	3	

(2) 研修生の感想

講義内容については、ほぼ全員が満足し、特に山梨県下における現地研修、その中でもグループ員宅における宿泊を通じ、具体的内容を把握するに役立ったと述べている。更に欲を言えば視察のみでなく、実際の活動に参加したいという要望がでてきている。

(3) 実施側の反省・評価

昨年度の初体験を基礎にして、通訳100%という実態から、日本語研修(1カ月)を加え、コーディネーター2人の必要性が認められたことは、内容及び運営に非常に効果的であった。このことは本研修の実施について、不可欠なことであると思われる。

短期間に生活改善普及事業の基本姿勢について全員理解したと思われる。このことは、研修目的をある程度果たしたと思われる。

基本になる英文資料の不足については、昨年通り遺憾である。このことについては、何等かの対策が必要である。

56年度集団コース/6.2.2生活改善普及
コース 評価会要約

担当(柳沢)

- 日 時 ①昭和56年8月25日, ②昭和56年9月3日
- 場 所 (社)農山漁家生活改善研究会
- 出席者 ①研修員, 農水省生活改善課(1), 研究会(2), JICA担当
②農水省国際協力課(2), 生活改善課(1), 研究会(2), JICA研一(2)

I G. I.

○来日前にG. I.を読んだか。読まなかったのはなぜか?

○G. I.へのコメント

II ブリーフィング

○有益であったかどうか

○ブリーフィングへのコメント

III オリエンテーション

○有益であったかどうか。

有益

○オリエンテーションへのコメント

IV 生活状況

○来日前の準備について

○宿舎についてのコメント

T. I. C. で問題なし。但し夜間の騒音が難

○食事, その他についてのコメント

T. I. C. 研修場所共に自炊施設があり, 便利。

V 研修一般

○期間について, 不適の場合その理由

期間はほぼ適当

時期は農繁期に。

- 研修プログラム（講義，実習，見学の配分）等について

今年度から始まった日本語研修は有効。

実習の時間が不足。

VI 講 義

- 科目，トピックについてのコメント

概論に比べ実践的部分が少ない。

- 講義の判りやすさについて

統計数字の羅列が多い。質疑応答の時間が不足。

- 講師についてのコメント

現役でない講師が多い。研修員の国の実情を理解していない。

- 講義法，使用教材について

視聴覚教材を活用してほしい。

- 他に希望される科目，トピック

VII 見 学

- 有益であったかどうか，その理由

農家宿泊があり，大変有意義

- 他に希望される見学先，人気の無かった見学先とその理由

食品工場，研究所等の見学，栄養研究所等希望。

VIII 実 習

- 有益であったかどうか，その理由

有益

- 他に希望される実習 人気の無かった実習とその理由

IX カントリーレポート

- 来日前に作成したかどうか，作成しなかったのはなぜか。

一部未作成

- カントリーレポートは有益であったかどうか。

有益（他の国の実情が理解できた）

- カントリーレポートに対するコメント

コースの始めに発表した方がよい。関係者は全員出席してほしい。

X 研修監理員

○監理業務に対するコメント

監理員と研修員との関係は良好で、特に問題なし

○監理員に対するコメント

今年度から2名に増員したため、翻訳等の業務もかなりこなすことができた。

XI 日本についての印象

○滞在中一番困った事はなにか。

○来日前と来日後の日本の印象について

日本人は勤勉、親切である。

日本は工業化によって、伝統の姿を失いつつある。

XII 総合評価

○このコースを発展させるための研修員の提言

今後は、講義だけでなく、普及員のレベルとの交流により、生活改善事業の実態に触れたい。

○このコースに対する研修員の総合的な意見

XIII ファイナルレポート

○ファイナルレポートの中で特に注目しておく点。

講義の方法について、多くの研修員が同様の指摘をしている。

XIV 評価会

○評価会に参加しての担当のコメント

研修員に問題意識が強く、研修中も大変熱心であったが、評価会においてもそれを反映して、鋭い指摘が多かった。

XV その他

○このコースについてその他コメントしておく点

本コースは、開始後2年めのため、まだ試行錯誤の段階であるが、関係者の努力で次第に軌道に乗りにつつある。

・今年度は、新たに日本語研修をとり入れ、監理員も2名備上したが、スムーズにコースを運営するうえでも有効だった。

・今年度は受入先の収容能力の問題で、c/pを集団枠で受入れたが、今後はc/pはc/p枠で受入れ、集団枠の候補者も定員通り受入れられるよう、受入先に働きかけていきたい。

・テキストを更に充実させていく必要がある。

農-9	コース名： 漁業協同組合	定員 10名
-----	--------------	-----------

受入期間： 56.7.2~56.12.18

関係省庁： 農林水産省

受入機関： 神奈川国際水産研修センター

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
バングラデシュ	1	1			
ビルマ	1	1			
インド	2	1			
インドネシア	0	0			
マレーシア	1	1			
フィリピン	2	1			
スリランカ	1	0			
タイ	2	2			
西サモア	0	0			
ブラジル	2	1			
チリ	1	1			
コロンビア	1	1			
メキシコ	0	0			
ザンビア	1	0			

受入担当： 馬渡 善治

コーディネーター： なし

研 修 監 理 報 告

イ. 研修面

G. I. 記載の Programme に従って、Schedule を作成し、その実施の内容は Record of Performance of Fisheries Coopective Course に示されている。

先ず水産一般の概念として、日本漁業概要、水産養殖、水産物利用、水産資源の講義があり、9月3日には、各人による自国の Country Report を発表させ、本論に入って、漁業協同組合論、漁業法、水協法、水産経済(経営)、水産統計、水産普及、漁業簿記、漁船保険、水産流通、漁業政策等に亘つての講義を実施し、研修旅行に当っては3つに分けた研修員の各グループによる特定の研究テーマに基づいての聞取調査を行わしめ、そのとりまとめたものを Study Report として発表させ(12月14日~15日)、その総合討議を行った本研修の最後のしめくりとした。

ロ. 生活面

終始漁業コースの研修員18名と生活を共にしたので、彼等の間での交友は深まり得がたい体験を積むことが出来た。生活面の事項は漁業コースの本報告書に書いたことと同じであるが、このコースでは一人インドの研修員(クマール)が研修旅行中より徴候を欠せた心臓の故障(狭心症の疑い)をうったえた。11月半ばに至り、医師の診断によるすゝめもあつて途中で帰国せしめた。

56年度 漁業協同組合コース

56.7 ~ 56.12

1981 7月 8月 9月

・印は共通講義

日本語は10月末日まで

日	曜	7月	8月	9月	曜	9月
1	水		JICA創立記念日		1	発達途上国の流通と技術協力経験 (高木)
2	木	米日			2	
3	金		漁具・漁法概要 (千賀)		3	カントリーレポート発表 (三宅・松本)
4	土		水産資源管理の基礎解析 (野村)		4	" (多紀・吉川)
5	日		" (〃)		5	" (野村・倉山)
6	月		水産物利用概論 (永山)		6	
7	火				7	スタディレポートガイダンス (三宅)
8	水	TICにてオリエンテーション	盆おどり(日どり未確定, 漁協と共催)		8	水協法 (森沢)
9	木				9	水産行政 (〃)
10	金		水産資源概論 (多紀)		10	東南アジア漁業の経済分析 (岩切)
11	土		" (〃)		11	" (〃)
12	日		漁業協同組合運動論 (藤沢)		12	消防訓練
13	月	入所(職員紹介, センター近郊案内)	" (〃)		13	
14	火	ブリーフィング(文房具, ユニホーム購入)	" (〃)		14	鎌倉(リクリエーション)
15	水	インタビュー(写真撮影, テキスト渡し)			15	
16	木	"	マリナー見学		16	長井漁業協同組合 (松岡)
17	金	市内引率	漁業協同組合論 (米坂)		17	" (〃)
18	土		漁業法 (森沢)		18	栽培漁業 (高橋)
19	日		" (〃)		19	県栽培センター見学 (〃)
20	月	開講式 11:00 ~	漁業協同組合センター		20	
21	火	寝食訪問 長井漁協, 映画	日本の教育制度と水産教育 (石橋)		21	日本漁業史考 (平沢)
22	水	日本語 intensive	三崎水高見学		22	" (〃)
23	木	"			23	
24	金	"	水産統計 (根井)		24	水産政策論 (〃)
25	土	"	統計の意義と取り扱い (山本)		25	定置網漁業(千賀)・さけますふ化 (高橋)
26	日	"	" (〃)		26	
27	月	"	水産普及 (古谷)		27	
28	火	"	" (漁家視察を含む)		28	
29	水	"			29	道東研修旅行
30	木	"			30	
31	金	日本の漁業(含む経済状況)概要(米坂)	発達途上国の流通と技術協力経験 (高木)		31	

旅行のため

1981

日	10月	11月	12月
1 水			1 水 スタディ・レポート回収
2 金	道東研修旅行	2 月 Questionnaire 配布;	2 木
3 土		3 祝	3 金
4 日		4 水・ 水産白登	4 土 レポート作成とり
5 月	漁業簿記 (大崎・三宅)	5 木 漁村社会と協同組合	5 日 まとめのための講
6 火	"	6 金	6 月 役に用う
7 水	水産経営 (米坂)	7 土	7 火 (プロ検討中)
8 木	"	8 日	8 水
9 金	研修成果 discussion (三宅)	9 月	9 木
10 土		10 火 九州研修旅行	10 金
11 日		11 水	11 土 (三宅・黒沼)
12 月	うなぎ養殖(高橋)・かまぼこ製造()...旅行のため	12 木	12 日 (松本・森沢)
13 火		13 金 漁船保険	13 月 レポート発表・水産技術・協同 (松広・野村)
14 水		14 土	14 火 組合発展の問題点の総合討議 (吉川・多紀)
15 木	静岡研修旅行	15 日	15 水 閉講式
16 金		16 月	16 木 移動
17 土		17 火 スタディ・レポート作成準備	17 金
18 日		18 水 "	18 土 帰国
19 月	中小漁業経営論 (大瀬原)	19 木 "	19 日
20 火	漁港論 (諏訪・三宅)	20 金 観音パーティ	20 月
21 水	漁業経営(漁船経営を含) (野中)	21 土	21 火
22 木	"	22 日	22 水
23 金	横須賀市民生協訪問	23 月	23 木
24 土	研修旅行成果 discussion (三宅)	24 火 旅行(東京)	24 金
25 日		25 水 "	25 土
26 月		26 木 "	26 日
27 火	水産物流通 (金子・三宅)	27 金 "	27 月
28 水	水産金融と農中金 (松広)	28 土 Questionnaire 回収	28 火
29 木	"	29 日	29 水
30 金	水産物貿易 ()	30 月 漁船	30 木 (土陸)
31 土			31 金

